

特集「人工知能と人材」にあたって

福井 健一

(大阪大学)

芦川 将之

(東芝デジタルソリューションズ株式会社)

国内の主要研究機関において理化学研究所革新知能統合研究センター (AIP)、産業技術総合研究所人工知能研究センターをはじめ人工知能関連のセンターが設立された。また最近の連日のように報道される AI 関連のニュースや人工知能学会全国大会の盛況からもうかがわれるとおり、AI に対する産業界からの期待も大きく、急速なブームの到来に伴って国内において数万人規模で AI 開発人材が不足しているといわれている。各企業や大学ごとの教育・人材育成では間に合わず、産学官連携して早急の対応が望まれている。また一方で、人材育成・人事に AI を活用することで、人材の最適配置、仕事の効率化を図ることも行われ始めている。さらに、機械的な仕事はますます AI によって置き換わることが予想されており、今後の AI 時代における働き方について考えることも有益である。そこで本特集では AI と人材に関して産学官における現状の把握や今後の在り方について、1. AI 開発・活用側の人材育成、2. AI による人材活用・効率化、3. AI 時代の働き方の三つの観点から眺める。本特集では 6 編をご寄稿いただいた。以下に概要を示す。

1. 「AI 人材育成のための教育プログラム：人工知能技術戦略会議での議論」(八木康史氏)

1 編目は、総務省、文部科学省、経済産業省の三省連携による人工知能技術戦略会議において人材育成タスクフォースの主査を務められておられる大阪大学・八木副学長からご寄稿いただいた。産学における AI 人材の需要と供給状況の現状把握から、求められる AI 人材像、そして現在展開中の即戦力をもつ人材育成のための社会人教育プログラムと今後の展望に関してまとめられており、大変有意義な記事である。

2. 「HR Tech の変遷」(岩本 隆氏, 池見幸浩氏)

2 編目は、AI による人材活用と仕事の効率化として注目されている HR Tech に関して、アカデミアから岩本氏、産業界から池見氏からご寄稿いただいた。日本国内ではまだまだ萌芽段階である HR Tech の歴史と技術動向を総括していただいた。欧米との違いや、今後ますます進行する高齢化、人口減少社会において HR Tech は新しい形で社会課題を解決する可能性を感じさせる大変読応えのある記事である。

3. 「岩本 隆×池見幸浩 対談—これまでの HR Tech と 2018 年からの HR Tech —」(岩本 隆氏, 池見幸浩氏,

梨子田光宏氏)

3 編目は、2 編目を執筆いただいた両氏に対談形式でこれまでの HR Tech の振り返りと今後の展望について討論された内容をまとめられている。対談形式のため読みやすく、2 編目は業界全体を俯瞰した内容であったのに対して、こちらは岩本氏、池見氏の経験や考えを中心に討論されており、この分野の今後の期待感が感じられる。

4. 「行動変容のための働き方アドバイスアプリケーション」(辻 聡美氏, 佐藤信夫氏, 早川 幹氏)

4 編目は、日立製作所の研究グループから国内の HR Tech 関連の先駆けともいわれるウェアラブルデバイスによる職場のハピネス計測の最新の動向をご寄稿いただいた。現在では計測から一步踏み込んで、行動変容を促すための働き方アドバイスアプリケーションを開発されており、社内で実証実験が行われている。働く人の「納得感」を重視してアドバイスを行うよう設計されており、今後の AI の在り方について示唆に富む記事である。

5. 「高齢者クラウド：クラウド技術による高齢者人材の活用」(廣瀬通孝氏, 小林正朋氏)

5 編目は、今後予想される超高齢化社会において AI を用いてシニア層の活用を推進する「高齢者クラウド」プロジェクトを主導されている東京大学の廣瀬先生、IBM の小林氏からご寄稿いただいた。シニア層の働き方の検証や、シニア層のもつ多くの知見や経験を生かすための人材検索エンジンなど AI を活用した新しい働き方に関してまとめられており、今後の AI と人との関わり方を示唆した大変興味深い記事となっている。

6. 「人工知能時代の働き方・考え方—組織で働く現場の声を通して—」(藤野貴教氏)

最後 6 編目は、「2020 年人工知能時代 僕たちの幸せな働き方」の著者であり、各種メディアでも活躍されている藤野氏にご寄稿いただいた。これまで講演会などで、企業で働く方々との議論を通じて感じられている働く現場の危機意識や問題の根源について掘り下げられている。アカデミアにいる方々にはなかなか伝わってこないと思われる企業で働く方々の生の声を感じられる。今後の AI には、不安を払拭するほどの圧倒的な利便性が求められている。

6 編いずれの記事もこの分野を第一線で活躍される著名な方々にご寄稿いただいたので、ぜひ一読いただきたい。